



DONC どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0803

三重県津市柳山津興600-5 滝澤方
600-5, Yanagiyama-tsuoki Tsu-shi

TEL 090-4867-1476

FAX 059-227-8010

№122 novembre 2021 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

会員の皆様にはすでに総会議案書にてお知らせの通り、前駒田会長に代わり、今年度から新たに伊藤会長をお迎えいたしました。

三重日仏協会 伊藤新会長ご挨拶

この度三重日仏協会の会長を仰せつかりました伊藤正明です。令和3年4月より、駒田前学長の後任として、三重大学学長を務めさせて頂いています。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

本協会は、日本・フランス両国の相互理解と友好を深め、両国間の文化交流に寄与することに目的に設立され、フランス語の講座、フランス料理・ワインを楽しむ会、コンサートの開催等、フランス文化に関連する活動を幅広く展開いたしております。

私自身のフランスへの関わりはそれほど深いものではありません。フランスには数回学術集会などの出席で訪問し、ちょうどコロナ禍の前の2019年9月にもヨーロッパ心臓病学会の学術集会がパリで開催され参加しました。日本とフランスでは相互に芸術と料理等での交流が盛んですが、私の専門であった循環器内科の分野でも交流が盛んになっています。心房細動という不整脈の根本的な治療法であるアブレーション治療は、フランス人Haïssaguerre先生が開発され、世界的にも循環器治療の一つの大きな柱となっています。三重大学からもフランスに留学して不整脈治療を学び、三重県の不整脈治療が立ち上がった経緯があります。また、難病であった肺高血圧症の新しい治療法開発とその応用にもフランスの医師・研究者の大きな貢献があります。これからはより広い様々な分野での交流が盛んになって行くと思ひます。

三重大学にもグッドマン先生やフランスからの留学生もおられ、様々な方のご協力を頂きながら、本協会の活動に貢献して参りたいと思ひています。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



三重日仏協会会長 伊藤正明

フランスをはじめ、海外や国内各地で公演を行っている劇団が、2014年より三重県津市を拠点に活動しています。主催者の鳴海さんに、三重日仏協会がインタビューをしてみました。

第七劇場 鳴海康平氏インタビュー

第七劇場について

1999年、演出家・鳴海康平と数名の俳優によって設立。

国境を越えることができるプロダクションをポリシーに、日本各地のみならず、国際演劇祭への作品出品など、国内外で公演。言葉の物語のみに頼らず空間や身体とともに多層的に作用する表現が評価される。国内外のフェスティバルなどに招待され、これまで国内25都市、海外5ヶ国11都市(フランス・ドイツ・ポーランド・韓国・台湾)で作品を上演。

2006年、劇団ユニークポイントとともに都内にアトリエ(atelier SENTIO)を構え、2013年まで東京を拠点に活動。

2014年、東京から三重県津市美里町に拠点を移設。Théâtre de Bellevilleのレジデントカンパニーとなる。

現在は三重県、関東圏、愛媛県の多地域在住のカンパニーメンバーで構成。



鳴海康平氏について

第七劇場、代表・演出家。Théâtre de Belleville、芸術監督。1979年北海道紋別市生まれ。三重県津市在住。早稲田大学在籍中の1999年に劇団を設立。「風景」によるドラマを舞台作品として構成。ポーラ美術振興財団在外研修員(フランス・2012年)として1年間活動。



演出以外にも、フェスティバルディレクターやアドバイザー、日本各地での俳優や市民、学生を対象としたワークショップを実施。教育・育成活動も行う。

- SENTIVAL! フェスティバルディレクター(2008-2013)
- 日中韓演劇祭 BeSeTo演劇祭・東京開催運営委員(2004, 2007, 2010, 2013)
- 芸術文化活動支援員(文化庁 芸術文化活動支援員派遣事業 2010)
- 愛知芸術劇場主催 AAF戯曲賞 審査員(2015-)
- 名古屋芸術大学 芸術学部舞台芸術領域 准教授(2021-) など

浅野 今日貴重なお時間をいただきありがとうございます。まずは、10月に三重県文化会館と金沢21世紀美術館で開催されましたチェーホフの『桜の園』についてですが、全公演完売の大成功ということで、おめでとうございます。私は三重での公演を見させていただきましたが、さまざまな読みの可能な、素晴らしい演出でした。

鳴海 ありがとうございます。そうやっていただけると嬉しいです。12月に宮崎県立芸術劇場での公演もありますので、よろしければぜひ見に来てください(笑)

浅野 プロフィールを拝見しますと、2012年にポーラ美術振興財団在外研修員としてフランスに行かれています。そのあたりの経緯を教えてくださいませんか？

鳴海 それまで韓国やドイツなどで海外公演は行っていたのですが、2011年に初めて、フランスで公演する機会がありました。それまでは、私とフランスはそれほど近い関係ではなかったのですが、パリで公演したとき、文化を使って人生を豊かにしようとする感覚、文化に対するプライドを感じる劇場文化などに感銘を受け、この国に身を置いて生活し、勉強したくなりました。帰国後、ポーラ美術振興財団の助成プログラムに申請し、ありがたいことに採択されました。それまでフランス語は学んだことはなかったので、渡仏までの1年間は独学で必死に勉強しました。

浅野 具体的にどうやってフランス語は勉強したのですか？

鳴海 NHKラジオと参考書だけです。どこかの授業に通ったわけではありません。1年間で仏検3級までは取ることができました。実際にフランスに行ってみたら、話すスピードがとても速く、はじめの半年間は言葉が聞き取れずにとっても苦労しました。半年過ぎたあたりから徐々にわかるようになり、1年後、かなり聞き取れるようになってきたな、これからだな、というところで帰国となったのが残念です。

浅野 パリ留学中のお話をもう少し教えてください。

鳴海 パリ市内や近郊の劇場、ルーマニアのシビウ演劇祭、アヴィニヨンの演劇祭など、ヨーロッパ各地を含めて、滞仏中300作品以上の舞台芸術を見ました。意味のわからない作品から商業的なものまで幅広く見ましたが、フランスという国では、劇場文化が社会や国に必要なものとして存在していること、それを支える文化政策、国のプライド、エリート主義的な社会階層なども感じることができました。文化にどっぷり浸った、幸せな日々でした。

浅野 東京から、2014年にこの三重県津市に移転した経緯を教えてください。

鳴海 1999年の旗揚げ以来、ずっと東京を拠点に活動を行ってきましたが、海外を含め全国で公演を行うなかで、東京以外を拠点にしても活動が可能なのは、と感じるようになりました。消費のサイクルが早い都市部の中ではなく、もっとゆっくりとものづくりに取り組める場所を探し始めました。その中で、三重県の方が今の劇場の場所を提案してくださったので、劇団員と相談し、思い切って移転することにしました。

浅野 三重はどうですか？東京との違いは？

鳴海 三重県に移り、じっくり創作活動を行うことができるようになりました。三重県は日本の真ん中にあるわけで、全国どこに行くにも不便を感じませんし、セントレアや関空へのアクセスも悪くないので、ここで作品を製作して、国内海外各地で公演するにも良いと感じています。生活コストも東京と比べれば格段に安いですし、ここ(美里)は自然に囲まれているのもいいですね。

浅野 三重に移ってから、演出家として、なにか変化はありましたか？

鳴海 東京では、自分たちがやりたいことを突き詰めて活動してきましたし、それで運営していくことができました。ところが津市に来て、普段あまり演劇を観ない方たちも見に来てくださる。その中には子どもがいたり、年配の方もいる。そういった方々に対しても届く作品を作りたいと、自分自身の内側から思うようになった、というのが大きな変化でしょうか。

また、その背景には、フランスでの体験も大きいかもしれません。演劇ファンを中心に動いている日本と違い、フランスでは、劇場文化が社会と生活に根付いています。「子供のための演劇」、ではなく、「子供と同時に大人も楽しめる演劇」も多く、



実際にフランスで素晴らしい演劇に出会いました。ファンやカテゴリーが細分化しがちな都市部ではなく、三重のような地方でこそ、観客の属性や年齢を問わない作品上演が求められると思います。今後も、家族で楽しめるレパートリーを増やしていく予定です。もちろん、古典作品や先鋭的な作品も継続して製作していきます。

浅野 コロナの影響は、いかがですか？

鳴海 やはり、予定されていた公演や活動の一部は中止せざるをえませんでした。直近ですと、今年の9月には三重オペラ協会と一緒にマスネの『サンドリヨン』の公演をする予定でしたが、中止となりました。私たちのカンパニーもインターネットを通じて応援寄付を募っております。応援していただけるとうれしい限りです。

浅野 今後の活動について教えてください。

鳴海 来年冬にギリシャ悲劇の『メディア』を、三重県総合文化センター中ホールで上演します。2017年に、フェミニズムの視点で『人形の家』を上演しました。その後、日本と台湾の共同制作が続き、2019年に『ワーニャ伯父さん』、2020年に『かもめ』、2021年に『桜の園』と、チェーフ作品が続きました。人生や孤独がモチーフとなる作品の上演が続いたので、もう一度フェミニズムを扱ってみようと思いました。自分の夫・子供を殺してしまう悲劇ですが、そうした状況に追い込まれる背景には家父長的社会システムがあるという点で、現代に共通する作品だと思います。

第七劇場 本公演としては初の
三重県文化会館 中ホール公演

メディア

原作：エウリピデス、セネカ、コルネイユ ほか
脚戯・演出：玉岡・鳴海 謙平
出演：木村千尋、小菅史史、諏訪七海 ほか


男性的社会の中で女性であることの苦悩と抵抗を描く
ギリシア悲劇の傑作

王女メディアが苦しみのもとに取った行動が
夫婦・家族・社会に刻まれた約2500年前から癒えない痛みとして響く

人間が人間であるかゆえの
悲しく、強く、美しい物語

MEDEA

会場：三重県文化会館 中ホール 日程：2022年12月上演予定
主催：三重県文化会館（主催者責任）／公益財団法人三重県文化振興財団
制作：芸術文化振興財団
<http://dainanagekijo.org>



インタビューを終えて

次回作品は、フランス17世紀三大作家コルネイユが初めて書いた悲劇でもある「メディア」です。三重県で、こういった古典作品を見ることができるとは幸いです。劇団のHPには、活動内容やご寄付の情報も掲載されていますので、皆さまぜひご覧ください。

【劇団HP】<https://dainanagekijo.tumblr.com/>

2021年度総会議案書・書面議決結果について

昨年につづき本年も総会議案書を、書面議決という形にてご案内させていただきました。会員の皆様より、第1号議案・第2号議案ともに、賛同をいただきました。ありがとうございました。4月の文芸講演会のほか会員同士のコンタクトなく寂しい想いです。

事務局にとっては、大変ありがたいメッセージを多くの会員の皆様よりいただきました。勝手ですが一部紹介をさせていただきます。

- コロナが早く収束してまた皆さんと楽しく食事をしてお話しできるといいですね。<K.H>
- 本年も総会・パリ祭パーティが中止で残念です。来年こそ開催できますように!! <B.K>

（事務局より）

※連載中のピアニスト伊藤隆之さんの《こんな時だからこそ～ "ちょっとフランス音楽はいかが?"》は誌面の都合上次号に掲載させていただきます。